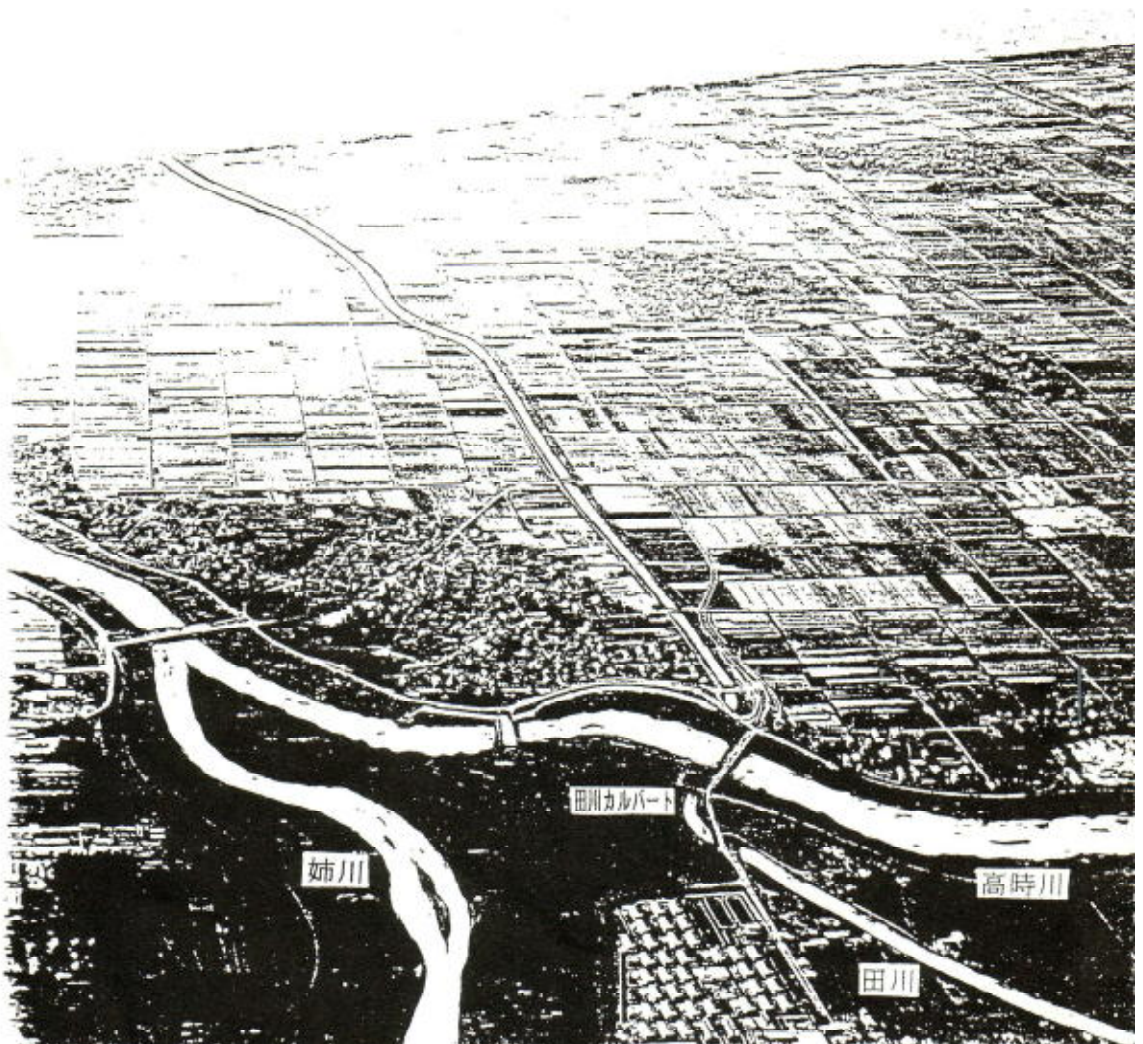


私たちの田川カルバート

虎姫小学校 四年生



私たちの田川カルバート

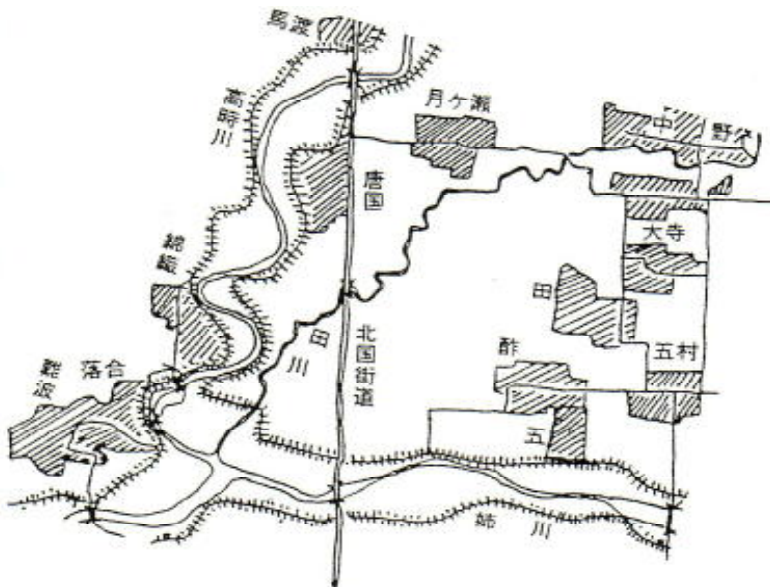
「川の下を川が流れている。」そんな日本でもめずらしい川が、虎姫町を流れています。それが田川です。どうしてそのような川が作られたのでしょうか。

江戸時代の終わりごろまでは、びわ町の落合で、田川は、姉川、高時川といつしよになつて琵琶湖に流れていました。

川には上流から土砂どしゃを運び、ゆるやかになつた川底に土砂をつもらせる働きがあります。姉川や高時川は、川が長くても大きいので長年の間に土砂がたまり、田川より川底が高くなつていました。しかし、田川は流れがゆるやかなので、その土砂を流すことができませんでした。

ですから、少し雨がふると川の水かさが増し、田川の水が流れないばかりか、逆に姉川や高時川の水が田川へと流れこんできたのです。

このため、唐国、月ヶ瀬、田、酢の四カ村では、田んぼや畑だけでなく家の中まで水につかっってしまうようになりました。北国街道（今の国道八号線）も水につかり、船でなければ通れなくなることもしばしばで、人々は困っていました。



《高時川の流れを変える》

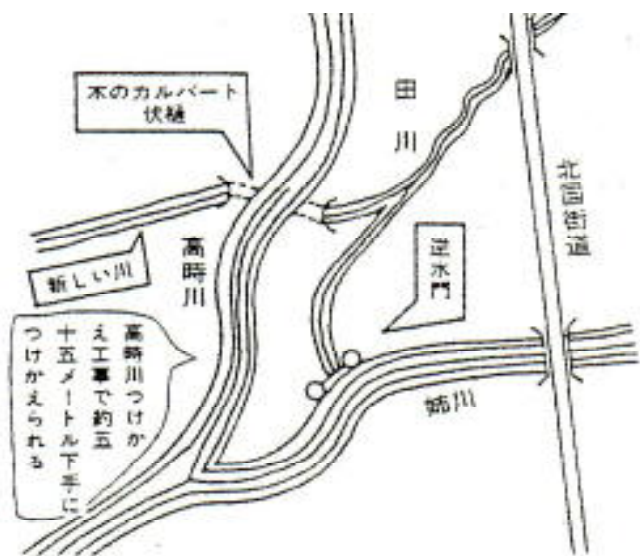
そこで、今から一五〇年ほど前の一八五四年（江戸時代の終わりごろ）、高時川の合流点を、三つの川の合流点から五五メートルほど下流で合流させ、田川の水を姉川へ流す工事をしました。田川と合流するところをはなすことによって、少しでも水が田川へ逆（ぎやく）り（ゆう）流するのを防ごうと考えたのです。

何しろ新しく高時川を作るのですから土地がいりません。ところが地形の上からどうしても四カ村以外の落合村を通さなくてはなりません。それで、落合村から地面をかりました。その借り賃（かりちん）（かりるお金）、毎年三〇俵（一八〇〇kg）の米（今のお金で約六〇万円）をしはらうことになりました。

しかし、田川の水を姉川へ流す工事をしてもたいしたきき目はなく、いぜんとして雨がふると水つきになりました。田や畑が水につかり米もとれず、唐国、月ヶ瀬、田、酢の四カ村の人々は大変こまりました。

《木のふせどいと逆水門》

こまりはてた人々は、姉川の水が大雨の時に田川に流れこまないように、逆水門を作り、さらに田川の水を直接琵琶湖に流すことを考えました。高時川の下に「木のふせどい」を作り、



そこから新しく切り開いた川（新川）を通して琵琶湖へと流すのです。

しかし、新しく川を作るといってもそれはなかなか大変な苦勞でした。というのは、新川の土地が四カ村のものではなく、びわ町の錦織にしこおり、落合おちあひ、難波なんば、八木浜やぎはまのものだったからです。びわ町の四カ村の人は、川ができるできるとと水害が起ころおこるかもしれないかもしれないといつところまでいきまいしたのです。一時は工事をあきらめなければならぬといつところまでいきまいした。

けれども、どうしても新川を作らなければならぬので、虎姫町の4カ村からびわ町の四カ村へ毎年米を八〇石（二〇〇俵、今のお金で、約四〇〇万円）はらうことで、やっとゆるしをもらつたのです。

彦根の殿様にも協力してもらつたことになりました。新川作りは、今まで田や畑や道だつたところをほつて川を作つていくのですから、大変な工事でした。朝早くから出て夜おそくまで働きました。川がほれたら、今度は道だつたところに橋をかけたり、用水路ようすいを作つたりもしなくてはなりませんし。しかしこれらの工事は、つるはしやくわなど昔の道具を使つてしたのですから、なかなか思つように進みませんでした。

こうして一八六一年、きの「ふせどい」と新川は二年がかりでやっと完成したのです。「ふせどい」は高さ一・二メートル、はば二・一メートル、長さ一二五メートルあまりのものでした。新川は琵琶湖の下流では、川はばが約七メートルもあり、深さは二メートル以上ありました。川の長さは、およそ二七〇〇メートル



ありました。

しかし、人々が喜んだのもつかの間、木のカルバート（ふせどい）と逆水門で水害が防げたのは、二、三年でした。木のカルバートは木で作られているために、高時川の水がしみこんで木がくさってきたりして水の流れが悪くなりました。しかも、姉川や高時川の川底が、一〇年ほど前とくらべると、一・五メートルも上がって、いつでも田川へ水が流れこんで来るようになったのです。

このため、田畑が水につかるどころか、北国街道も通れなくなってしまうこともたびたびでした。また、木のカルバートがくずれおちでもしたら、高時川の堤防が切れて大きな水害になるかもしれません。

《田川カルバートと前田莊助》

「カンカンカン」鐘かねがなります。それと人々は身の回り品を手早たくりゆうに持ってひなんします。堤防がくずれます。荒れくる濁流だくりゆうは田もはたけも家もひとのみにごうごうと流れこみ、そのあとの見るかげもないひどいありさま。むざんなものでした。

こうした水害の光景を幼い時から見て来た、月ヶ瀬村の前田莊助は、三六歳の若さで「年寄としより」という大事な村役についていました。「何とかして一日も早く、沿岸数カ村の人たちのため、田川の水引きをよくして、水害をなくしたい。」



前田莊助 (1829 ~ 1924)

莊助はねてもさめてもそのことで一心でした。こうした被害が特にひどかった月ヶ瀬村、唐国村、酢村、田村の四カ村がひとつになって、「ふせどい」を拡大する運動を起こしたのは、江戸時代の終わりごろでした。しかし、そのころの日本は、幕末から明治維新への大きな転換期にあたっていて、こうした事業は手をつけられそうもなく、十数年間はむなしくすぎていきま

した。明治三年、莊助は「庄屋」となり、明治五年それは「戸長（今の区長）」と名前が変わりました。

そのころ、田川の水引はいつそう悪く、今ある田んぼのほとんどがあしのおいしげる沼地と変わり、ついには「カエルがしょうべんしても水つきになる」「水のつきが瀬」とさえ言われるほどになりました。土地の人は生活が苦しくなるうえに、こうした土地を持っていても税金はかかるばかりで、しかもその土地を人にゆずろうとしても、かなりの金をそえなければもらい手もなく、こまったあげくにこの土地を去っていく人さえあつたと言われています。

一方、田川の「ふせどい」はますますくさってきてこわれるばかりです。姉川・高時川の川底もそれらが作られたころより二メートルあまり高くなり、その水はつねに田川に逆流して水害はますますひどく、村を通ずる北国街道は、少しの雨にさえ歩いて通ることもできなくなっています。



こっすい
洪水にそなえた船

た。もし「ふせどい」がこわれ、姉川や高時川の堤防がこわれようものなら、被害はただ四カ村だけにとどまらず、その付近一帯の村々も水にせずみ、田畑や家屋はもちろん人命までもあぶなくなってしまう。もう一刻もほつってはおけない状態になりました。

莊助は、唐国村の野村太兵衛、酢村の国友長左衛門、田村の宮島甚助らと力を泡合わせ命をなげうってこの水害を防ごうと立ち上がりました。しかし、そのころの技術では田川の「ふせどい」を新しくつくりかえ、水路を広げることがそう簡単な工事ではありません。当然下流の新川も広げなくてはなりません。そうしなければたくさんのお金や人手が必要で、文字通り自分の財産までも投げ出して取り組まなければならぬ工事なのでした。

しかも、下流の人々は土地の減ることをきらい、また水の利用が悪くなることも心配してか、反対する人も多かったのです。そのため莊助らは村の人々や反対する下流の村人たちに工事の必要性をうったえ、その協力を求めて歩かなければなりません。それは本当につらい日々の連続でした。

また、このむずかしい工事を完成するためには、国や県の助けを受けなければなりません。当時大津まで行くには、徒歩で行くか船でいくかしかが方法がありませんでした。

莊助たちは、夜の2時ごろ起き、八十キロに近い道を歩いて、その日の夕方によくやく大津に着きました。翌日県庁や議会などをたずねて回り、夕方からまた長い道のりを夜をかけて帰ってくるのでした。それでも、莊助はひまさえあれば県庁や県議



籠手田神社

水引神社

会をたずね、田川水害のひどさを説明し、工事が一日でも早く進められるよう真剣にうったえました。熱いなみだがいつもほほを伝って光っていました。このような苦勞が来る年も来る年も続けられました。

村の人々のことを心から考えることになった思いは相手を感じさせずにはおきません。一八七九年（明治十二年）に、県は政府の土木技師のデレーケに調査をたのみました。その結果は「新川の川はばを広げて田川の水を流し、さらにカルバートを数倍に広げる」というものでした。そのころの県令（県知事）だった籠手田安定は、莊助らの思いにいたく感動し、一八八二年（明治一五年）に田川改修の計画を県議会に提案することにしました。

莊助をはじめ四カ村の人々はどんなにか喜んだことでしょう。

「私のできることはすべてやりつくした。あとは神様の助けを待つばかりだ。」その日から二日間、大津の天満宮にひたすら祈りを続ける人の姿がありました。言うまでもなく県議会の通過を一心に祈る莊助とその同志の姿でした。

しかしその結果は意外な内容でした。県議会はそれを否決してしまつたのです。

その工事のためにばく大な費用がかかること、利益を受けるものが限られていること、下流の新川を広げるのに反対の声が強いこと、などがその理由でした。莊助らの悲しみは、また



天満宮に奉納されたつりどうろう

籠手田こてたがけんれい県令の悲しみでもありません。

それでもなおもあきらめない莊助らの熱意に強く動かされた籠手田県令は、翌年よくねん、田川改修案を再び県議会に提案しました。しかし、またも同じ理由で否決されてしまったのでした。

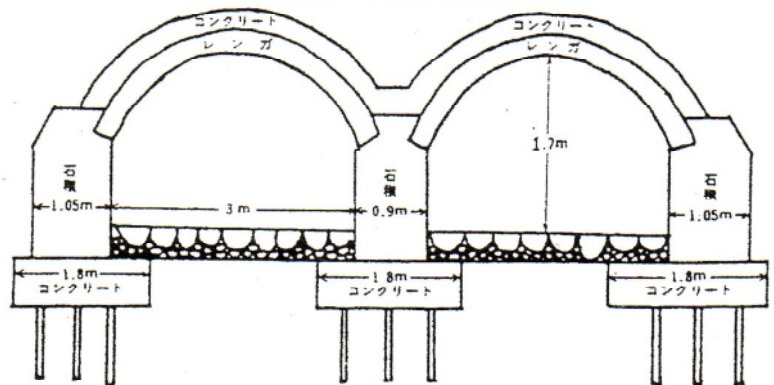
「このうえは国の許可を受け、強制工事ききょうせいに取りかかるより方法がない。」県令の決断はくだりました。県令は政府と相談し実行にうつしました。莊助らの願いはついにかなったのです。

その年の十一月、工事は寒天をついて始められました。そのころの川工事は、水の少ない冬に行うよりしかたがなかったからです。手足がこごえる水の中で村人たちはげまし、先頭に立って働く莊助の顔は、それでも喜びに満ちていました。

この工事はオランダの技師デレーケの案によるもので、木のかわりになんがや石やセメントを使い、高さおよそ一・七メートル、長さ一〇メートルにおよぶ上部が円形のふたすじのトンネル式水路で、これまでよりずっと大きなものでした。そして川のはばも、一・八メートルよけいに広げられました。翌年七月完成を間近にひかえながら、降り続いた長雨のためにこわれてしまうなどの困難こんなんがありました。明治一八年七月、洋風カルバートはみごと完成しました。上流四カ村が「ふせどい」を新しく造りかえる運動を起こしてから、もう何年たったことでしょう。村の人々はもちろん、莊助もただ感激かんげきにむせぶばかりでした。

「このようにりっぱにできあがったのは、まったく神の助けであり、また籠手田県令のご恩おん

田川カルバート断面図 (全長108m)



のたまものである。
莊助らは大津の天満宮に参拝し、「つりどうろう」を奉納して心からお礼を述べ、またカルバートにほど近い水引神社の横に、籠手田県令をまつる社を建て、長くその恩にむくいることをちかいあいました。

このための費用は、四八八四一円で、そのうち約三分の一の一五〇〇〇円（今のお金で約一億五千万円）四カ村が金を出しました。下流の道路、橋、用水路などの費用も、四カ村が出すというものでした。

しかし四カ村はお金も米もありません。なぜならんがのカルバートができるまでは、二、三日の雨で大水つきになるのですから、米などとてもとれませんでした。ある村では流れてくるわらたばを大事そうにまるで宝物でもひろったように持ち帰った人もあったという話も伝えられています。一五〇〇〇円の取り立ては、村の人々にとって大変きびしかったです。

それでもカルバートを作らなければ水害はなくならないので、村の人は「振り市」をして、金になるものは全部売ってしまったのです。「振り市」というのは、集まってきた人たちにねだんをつけてもらって、なるべく高いねだんで家の道具などを売ることです。田村ではなんと寺まで売ってしまいました。莊助らは、そのほかに借金をしてでも金を出したのです。

こうして四カ村の人は、工事に働くだけでなく、みんながまずしいくらしをしてまで、カルバートを作るために力を合わせたのです。



高時川川底にはりつけられた石

その後曲がりくねった田川をまつすぐにしたり、高時川の川底に石をはりつけて、水が入りこまないようにする工事も行われ、大水の被害は^{ひがい}ずいぶん減りました。

《田川治水功^{たがわちすいこうろうしや}労者の碑^ひ》

莊助は九六歳の長^{ちやうじゆ}寿を全^まうして、大正一三年一二月世を去^さりました。四カ村の人々は莊助をはじめ功績^{こうせき}のあつた人々を長く世に伝えたいと考え、田川のほとりに「田川治水功^{たがわちすいこうろうしや}労者の碑^ひ」を建てて、その苦労を長く伝えていきます。それには「水害の心配のなくなった村へ、よその土地へ行っていた人も帰ってきて、住みつくようになった。」と記しています。

現在見るこのできるカルバートは、一九六六年（昭和四一年）三月にさらに近代化されて完成したものです。これらの先人の苦労により、沼のようだった荒れ地はりっぱな田畑にかわり、米もたくさんとれるようになり、私たち虎姫町民は安心してくらすことができるようになったのです。



現在のカルバート



《田川カルバートの学習を終えて》

Vertical dashed lines for writing.

最初にできたれんがのカルバート





四年 組	名前	
------	----	--